

## 第9章 勤労と勉学の図像学

### 二宮金次郎像の盛衰をめぐって

井上章一

#### 1. 働く像と遊ぶ像

小学校の校庭には、銅像を置いてあるところが多い。とりわけ、男児と女児が並んでいる姿をかたどったものはよく見かける。少年少女が手をつなぎ、親愛の情をしめす像。手足をほどよくのばして、躍動感をあらわす像。たがいに、ハトとたわむれたり楽器に興じたりといった様子をとらえた像……。とにかく、男女の子供がペアーでなにかしている姿がじつに多い。

こういう銅像は、その多くが卒業記念に、子供たちとその両親から贈られる。まれにはライオンズ・クラブをはじめとする慈善団体からも寄付される。

もちろん、寄贈者たちがこういった像を造っているわけでは、決してない。彼らは、しかるべき業者から、これらの像を購入して学校へ納めている。ふつうは、学用品類を日常的に学校へ納入している業者が、それらの販売をてがけている。具体的には、業者が作っているメモリアル用のカタログから、選定することになる。

そして、銅像を選ぶ場合は、少年少女の並立像になるケースが、近年増えている。とくに、1980年代からは、それが圧倒的な潮流になっているという。

業者たちは、しばしばこれらの像に、「希望」、「ふれあい」といった名前をつけている。たしかに、少年少女並立像からは、そんなイメージの伝わってくるのがままたまある。「希望」や「ふれあい」といった言葉を図像化すれば、こういうふうになるということか。

かつて、小学校には二宮金次郎の像がよく置かれていた。背中に薪を背負いながら本を読んでいる少年像が、校庭像の主流を占めていた。江戸時代の篤農家、二宮尊徳に負薪読書の伝説があることは広く知られている。そういう少年時代の物語が、以前は銅像化されて各学校へ普及していたのである。

二宮金次郎像は、働きながら学ぶ姿を図像化させている。背中の薪が労働する姿をあらわし、読書の姿勢が学習の様子を示している。まことに勤勉できまじめな態度が、銅像として鑄込まれていたと言えるだろう。なお、戦前の修身教育では、親孝行という徳目も、二宮金次郎には期待されていた。だが、銅像に関するかぎり、直接的なメッセージは労働と学習の二点にしぼりうる。

今日よく見かける少年少女像は、その点まことに対照的である。現代の彼らは、決して働いてはいない。また、勉学に励む姿も見せてはいない。金次郎と比べれば遊んでいると言ってもいいだろう。

なお、現代の学校では校庭にロダンの「考える人」を置いてある所もよくある。これなども、見ようによっては学習する姿としてとらえられようか。だが、学校も学習の大切さを啓蒙したくて、この像を置いているわけではないだろう。あくまでも、ロダンの芸術作品だということに、設置の主眼はあるはずである。

ほかに、試験管を手にした理科実験の姿を体現させたような像が、売れることもあるという。だが、そういったものを、今日における校庭像の主流だとみなすわけにはいかない。あくまでも、多数派は少年少女の遊戯像なのである。

校庭からは、いつのまにか労働と勉学を体現させた金次郎像がなくなった。そして、それに比べれば、より遊戯へ傾斜した少年少女像が増えてくる。勤労と学習から、遊びへと、校庭像はその姿を変えてきたのである。

こう書ききると、たちまち一つの反論が出てこよう。すなわち、今日でもいまだに二宮金次郎の像を置いている小学校は存在する。決して消滅しきってしまったわけではない。果たして、労働と勉強の少年像がなくなったと、そう簡単に言えるのか。以上のような批判は、当然起こってくると思う。

1988（昭和63）年に、東京23区で実施された、金次郎像の残存状況調査がある。大木順子による、23区内全小学校の悉皆調査がそれである。これによれば、940校のうち、二宮金次郎像を残していたのは、134校であった。約14パーセントの残存率があったということになる。恐らく、他府県でも似たりよったりの残存状況になっていると思われる。金次郎像は、確かに消え去ってはいないのである。

だが、だからといって、金次郎像を今増えつつある校庭像だと見なすことはできない。事実、今ではほとんど売れていないのである。現在、小学校に残っているものも、ただ残存しているということとどまる。新規に設置されていくものは、皆無に近い。

こういうメモリアルは、その大半が寄付によっている。だから、寄贈者の了解がなければ、撤去はしきれない。そのため、取り外すこともまならず、そのままいつまでも残存し続けたというケースはけっこうある。是非残しておきたいという判断から、残されたのではない。ただ、残ってしまったというのが、残存しているものの大半を占めている。

やはり、現代の趨勢は、少年少女像の普及にある。金次郎的な労働と勉強から、男女児の遊戯へと、時代は向かっているのである。金次郎像にいくつかの残存例はあるが、そのことでこの見取図をくつがえすわけにはいかない。

意外に思われるかもしれないが、金次郎像は1950年代までは、けっこう新設されていた。新しく作られるケースが、その頃まではかなりあったのである。目に見えて設置点数が減りだしたのは、1960年代へ入ってからであった。

第二次世界大戦の敗北後は、建てられなくなったのではないかと、考える向きもあろう。金次郎像は、戦前の皇国教育を象徴する。だから、戦後の民主教育が始まってからは設置されなくなったと、そう思い込む者は多い。占領軍は小学校から金次郎像を除去させたはずだという先入観を抱く者もいるだろう。

確かに、いわゆる戦前的な象徴は、敗戦後に撤去されることが多かった。御真影、ならび

にそれを祀っていた奉公殿が、まず取り除かれている。教育勅語を大書きした垂れ幕なども取り外された。二宮金次郎像も、それと同じ運命をたどったのではないかと、つつい考えやすくなるものではある。

しかし、金次郎像は、戦後改革の荒波を越えて延命した。戦時中に、銅の供出で鋳つぶされたものも、戦後に再建されたりしている。占領軍も、この像についてはまったく見始めなかった。むしろ、二宮金次郎を日本のアブラハム・リンカーンだと、高く評価する声さえ一部にはあったほどである。もっとも、占領軍は金次郎像をきらうはずだと早合点して、自主的に除去させた学校も、まれにはあったのだが。

繰り返すが、今日では「希望」や「ふれあい」といった像が、流布している。その図像に戦後民主主義のにおいを嗅ぎつける者は多かろう。金次郎から、少年少女遊戯像へと、校庭像が移っていく。その推移に、戦前から戦後へと至る価値観の変化を読みたがる向きも、あるいはあろうか。皇国思想からデモクラシーへと時代が変わったことを、校庭像の変化は示している、と。

だが、金次郎像から少年少女像への移行は20世紀の後半に進行した。戦前戦後の境目である1945年には、そういう変化が見られない。事実、金次郎像は、1950年代を通じて、かなりの設置量を誇っている。日教組が一番戦闘的に振る舞い、戦後民主主義の喧伝された時代にも、建てられ続けていた。そして、少年少女像が圧倒的な隆盛を迎えるのは、1980年代である。いわゆる保守回帰が目立ちだした頃に、それらは普及した。

金次郎像の新設は、1678年代に入って下火となる。少年少女像は、1980年代から急成長を遂げていく。1960、70年代は、両者の過渡期だと言えようか。校庭像が、金次郎から少年少女像に変わっていくその時期は、戦前戦後の区切りから、四半世紀ほど隔たっているのである。

こういう推移を、はたして戦前から戦後へという価値観の変化で説明してもいいものか。戦前から戦後と言うにすれば、あまりにもその時期が遅すぎる。もっとほかの説明が探されるべきだろう。一見、民主主義を象徴しているような変化ではあるが、実際にはそうでもないのである。

なお、戦前の金次郎像は、文部省などの指導によって普及していたわけではない。国家は御真影や教育勅語の浸透は、積極的に進めていた。だが、金次郎像に関しては、そのようなことをしていない。金次郎像は、銅器や石材の業者がそれを学校へ売りこんだために広がった。そして、それ以外に普及の理由はない。業者たちは、文部省のお墨つきを欲しがっていたが、同省はそれをついに認めなかったのである。

銅器の産業は、日本だと富山の高岡が約9割のシェアを占めている。そして、高岡の銅器業者たちは、20世紀に入ってから偉人像の量産化を狙っていた。楠木正成、乃木大将、日蓮、親鸞などといった人物の銅像を売り込もうとしていた。そして、1930年代には小学校で二宮金次郎がヒットする。金次郎像は、その売りこみがとびぬけてうまくいったケースだと言える。

戦前に、大半の小学校で金次郎像が置かれたのはそのためである。修身教育のスターでも

あった金次郎へ目をつけた、営業戦略の勝利だったと評せよう。文部省などの直接的な指導があったというわけでは、決してない。御真影などを撤去させた戦後改革が、金次郎像に及ばなかったのは、そのためでもあるだろう。

## 2. 社会と校庭

小学校の教科書が国定となったのは、20世紀初頭のことである。修身科の場合は1904（明治37）年から、国定教科書が刊行された。そして、二宮金次郎はいくつかの徳目を象徴する人物として、最初から取り上げられている。国定教科書は、以後4回の改訂を受けているが、金次郎はそのすべてに採用されていた。戦前の修身教育が理想とした、その代表的な人物だと言えるだろう。

とりわけ目立つのは、勉学、勤労、孝行といった徳目が、金次郎を通して教育されていた点である。よく学び、働き、親を大事にする金次郎は、それらの点で子供が規範とすべき人物だとイメージされていた。1930年代になって、その校庭像が普及したのも、修身教育のこういった背景があったからだろう。

さらに注目したいのは、当時の小学生たちが置かれていた状況である。今日だと、小学生がいわゆる労働をすることはあまりない。若干の家事手伝いがあるぐらいだろう。基本的には、勉学と遊びに時間を使っている。だが、20世紀前半の小学生たちは違っていた。彼らはしばしば家の仕事、農作業、育児、店の用事などを受け持たされていたのである。

この傾向は、時代を溯ればのぼるほど、顕著になる。たとえば、学校教育が制度化された当初は、それに反対する農村の一揆すら、場所によっては発生した。農作業を手伝うべき労働力＝子供が、学童として学校へ通いだす。そのことが、学校による労働力の不当な横取りとして、農民たちには写っていたからである。

さすがに、20世紀ともなるとこういう反発は衰弱していった。だが、それでも子供に労働を期待する心情は、なかなかなくなる。小学校の過程が終了すれば、あとはいわゆる奉公を含め、就労させられる。20世紀の両大戦間期ごろまでは、それが当たり前のこととして受け止められていた。一部のアッパークラスを除けば、それが国民多数の常態だったのである。

働きながら学習する金次郎像は、こういう時代相をも反映させていただろう。勉学と労働は両立しうる。そのことを、金次郎像は具体的な図像を通じて語りかけていた。

だが、20世紀の後半ともなると状況は目に見えて違ってくる。もうこのころには学童に労働を期待する気運が衰えだしていた。高等教育も、国民的な勢いで普及する。子供たちは次第に働かなくなり、遊ぶことをもっぱらとするようになっていく。

金次郎像が、1950年代を最後に、以後は新設されなくなったのも、そのためではなかったか。金次郎像は、さきほども述べたように、勤労と勉学の両立を象徴する図像である。だが、もう子供たちが働き手として期待されるような時代ではなくなった。彼らは遊び、そして学べばそれでよい。そんな時代相が労働を象徴する金次郎像を不要にしたのだと思う。

1960年代になると、小学校の校庭へは特別な人物像が、あまり建たなくなる。少年少女像

の先駆的な設置例も、いくらかはあるが、まだそれほど目立たない。新しく何かが設けられる場合は、抽象的なオブジェ類が多かった。だが1980年代には、少年少女の躍動感を表現した校庭像が急激に増えていく。

子供の元気に遊ぶ姿が、期待されるようになってきたとういことか。しかし、勉強については以前と同様、いや従来以上にその重要性が増している。にもかかわらず、1980年代以後の校庭像は、ほとんど勉強をあらわさない。もっぱら遊戯の姿を強調する。いったい、これはどうしてか。

遊びながら学習する像が作りにくいという、彫刻制作上の技術的な事情はあるだろう。だが、ここでは遊びこそが強調されなければならなくなるに至った事情へ、目を向けたい。

1980年代には、都市部の学校を中心に、通塾率が増大した。家庭教師を雇う家庭も増えている。子供たちには、いままで以上に勉強というプレッシャーがのしかかっていた。学力偏重が世論の指弾を受けるまでに至っている。校庭像が、この時期になって明るい躍動感を訴えだしたのもそのせいかもしれない。学力に傾斜しすぎる時代相が、遊戯を楽しむ学童の姿をもたらしたのではないか。

さらに、塾や家庭教師など学校以外の教育機関がウエイトを高めてきたことも、そこには影を落としているだろう。学力向上の一点に限れば、塾などの力量は学校のそれを上回る。父兄の中には学校では間に合わないから塾で勉強させているというものも多かるう。

かつて勉強に関しては、学校が独占的な立場を、生徒たちの間で確立していた。だが、近年では学校以外の教育機関が彼らの心へ入り込みだしている。学校は次第に独占的な立場を失い、あるいは劣位にさえ置かれるようになってきた。

義務教育の開始とともに、勉学を名目にして各家庭から労働力を奪っていった学校。その学校が、今や同じ勉学という要因のために生徒の心を塾などへ奪われだしている。校庭の少年少女遊戯像は、そのあたりの危機感を反映させた図像ではなかったか。学力だけに限れば、とうてい塾には勝てない。だが、学校では生徒どうしのふれあいを通じた全人教育を、行っている。その知育以外の部分をアピールしたいという、そんな時代の状況が学校に、ああいいう像をもたらしたのだと考えたい。

ここまでは、校庭像の変化を学校と社会を取り巻く状況の移り変わりで説明してきた。いわゆる教育史的な解釈に終始した。だがどうだろう、ひょっとしたら、そこには勤労と余暇をめぐる国民世論の動静もいくらかの感化を与えていたかもしれない。

今日の日本では、余暇、レジャーの重要性が、各方面で喧伝されるようになってきている。レジャー産業からはもちろん、政府、自治体などといった行政機関も、そのことを唱えている。こういう現象がはっきりしてきたのは、1960年代からだろう。レジャーという言葉が、高度成長を唱えた池田内閣の1960～62年に、流行語となったのも、記憶に新しい。レジャー時代などという評語がとびかうようになったのも、その頃からである。以後、週休二日制に象徴されるような労働条件の変化も、端緒につきはじめる。1980年には企業も行政もそのことへ本格的に取り組みだしていた。

小学校の校庭像が示した変化も、どこかでこうした趨勢と繋がってはいはしまいか。働きな

がら学習する金次郎像から、遊戯す少年少女像へ。この変化は、1960年代から80年代にかけて起こっている。時期的には、余暇・レジャーの重要性が、オーソライズされていく時代と並行する。内容的にも、労働・勉強から遊戯へという移行は、余暇思想の普及と通じあう。校庭像の変化が、労働と余暇をめぐる価値観の変化に呼応していると想像されるゆえんである。

余談だが、校庭像の変化から読み取りうることを、あと二つだけ添えておこう。

ひとつは、新しいものが少年少女、つまり男女のペアーを並べている点である。かつての金次郎像は、いうまでもなく少年像であった。20世紀中頃までの小学生たちは、少年、男児の像ばかりを見せつけられてきたのである。男子生徒も女子生徒も区別なく。だが、今では男女の両性を並べた像になってきた。そこに、ある種フェミニズム的な社会史上の変化が読み取れる可能性はあるだろう。

さらに、現代の校庭像が、いわゆる偉人ではない点にも目を向けたい。二宮金次郎は立志伝中の人物であった。そうした偉人の像が、学童たちの規範としてクローズ・アップされていたのである。だが、現代の少年少女像は、そういった特定の個人を図像化させていない。匿名の、それこそどこにでもいそうな男女児を彫刻に仕立てている。立志伝中の人物、偉人を前面へ押し出す教育が衰退したことを、そのことは物語っているように思う。

どちらも、まだはっきりそうだと論じうるわけではない。今後の図像学的な課題になりうることだけを、ここでは記しておく。

### 3. 世界のなかの金次郎

アメリカのロスアンジェルスに、二宮金次郎像の建っているところがある。リトル・トーキョーにあるさくら銀行ロス支前の広場が、それである。では、どうしてそんなところに金次郎像があるのだろうか。

さくら銀行が同地へ支店を出したのは1981年のことであった。まだ、さくら銀行ではなく三井銀行と呼ばれていた頃のことである。

三井が同支店を開設する際に、ロス市当局は銀行側へ、モニュメントの建設を要請した。ロス市の都市美観条例に基づいて、広場に記念建造物を置いてほしいと、頼まれたのである。

三井銀行は、この要請に応じ、ビルのオーナーであるアルバート・タイラ（平良）と相談しあうことになる。これに対して、タイラは二宮金次郎像を建てたいと回答した。日系一世の父親から、偉人・二宮尊徳の話をよく聞かされていたことも手伝ったらしい。父親への敬意と、日系人の開拓精神を表すためにも、広場へは金次郎像を建てたいと申し出たのである。

銀行側は、アメリカの反日感情を恐れて当初は渋っていたという、だが、オーナーの情熱に押されて、ロス市へ金次郎像の建設計画を提示した。

ロスアンジェルス市当局は、しかしこの提案に理解を示さなかった。建設許可もなかなか下ろさない。待ちきれなくなったオーナーのタイラは、無許可のまま金次郎像の建設に踏み切ることとなる。日本の業者に発注し、広場へ勝手に建てさせた。

もちろん、ロス市当局は、そのことを快く思わない。さっそく銅像の撤去命令を出して、

この像を取り除こうとした。この命令は、しかし日系人社会の大きな反発を引き起こす。リトル・トーキョーの若い日系三世たちが、像の回りに数十人でピケを張って、これを守るようにさえなった。

若い世代が体を張って二宮金次郎像をガードする。現代日本では考えられない現象である。もちろん、彼らが勤労と勉学の金次郎精神を保っていたからではないだろう。日系人社会のシンボルたりうる像が、危機を迎えているということに反応したのである。

日系人たちの反発に驚いたロス市は、公聴会を開催する。そして、二宮像の意義を了解し、その設置を公認した。金次郎像は都市美観条例にそうことが認められたのである。

先に、1960年代以後は、あまり金次郎像が建てられなくなったと書いた。確かに小学校の校庭に関する限りそう言える。だがそれ以外の場所に目を移せば、現代でも金次郎像が新しく設置されるのを見ることはある。近年では、東京八重洲ブックセンターが、店頭で金次郎像をおいて評判を呼んだ。探せば、ほかにも似たようなケースがけっこうあるだろう。

最もそれらも勤労と勉学の精神を重んじてのことでは、必ずしもあるまい。確かに、一部の企業人が幼時の金次郎体験をノスタルジックに回顧して、その像を置くことは今でもある。だが、今国内で設置される場合は、もっと違う意味合いを体現しているのではないか。

たとえば、八重洲ブック・センターの場合は、読書をする姿が書店の客引きに利用されている。これなどは、本来の金次郎、修身教育的なそれとは違うだろう。余暇、遊戯という文脈で眺めれば、それこそ遊び心で設置されたのではないかとも思えてくる。ロスアンジェルスで金次郎も、日系二世にはかつての修身めいた意味をもっていた。だが、若い三世、四世にもなると、もうそういうニュアンスはよほど弱くなっているだろう。

私見によれば、負薪読書の図像は、イギリスの宗教書『天路歷程』(The Pilgrim's Progress)に由来する。『天路歷程』は1678年にジョン・バンヤンが著した。そして、同書の冒頭には、背中に大きな荷物を背負い、手にした聖書を読みながら歩いていく男の図像が示されている。日本語には1880年代の後半に訳された。

二宮金次郎の図が、負薪読書のかたちで最初に示されたのは、1891年のことであった。幸田露伴が学童向きに著した『二宮尊徳翁』の口絵に描かれた図像がそれである。おそらく、『天路歷程』に掲載されていた図像を、翻案したのだろう。もともとは、キリスト教的な含意のあったものを、勉学と勤労の図像へ移し替えさせたのだと思われる。

今では、それが書店の客引きにも活用されるに至っている。荷物を背負いつつ本を読む。このイメージが、時の流れを経てさまざまに読み替えられていく様子が、興味深い。

話はとぶが、中国の南宋に、かつて沈麟士という隠逸の学者がいた。その沈麟士の少年時代を、負薪読書の姿で描いた絵本が台湾で売られている。『文化児童故事叢書・第九冊－勤労』(民国71年)が、それである。ここでは沈少年が、日本の二宮金次郎とそっくり同じような姿になって描写されている。違いがあるとすれば、沈少年が右手にオノを持っていることぐらいか。

沈麟士その人に、負薪読書の話が伝わるわけではない。『南史』の第76巻に、「負薪汲水」とあるから、薪を背負うという伝説はあったのだろう。だが、金次郎と同じ話が、その少年

時代について残っているわけではない。にもかかわらず、現代台湾のある絵本は沈麟士の少年時代像を、金次郎のようにして描いている。

実は、台湾では、二宮金次郎のことがけっこう広く知られている。金次郎が読んでいる本は、儒教の古典『大学』である。この少年でありながら儒教を深く学ぶという姿が、中国人の心をくすぐったのだろう。二宮金次郎の像も、同地ではけっこう売られたりしている。おそらくその普及がついには沈麟士の人生を、二宮風に変えてしまったのだろう。かつてイギリスの古典である『天路歷程』は、二宮金次郎像に感化を与えていた。そして、今ではそれが中国伝播をめぐる世界史的逸話のひとつとして、ここに披露しておきたい。

さきにも述べたように、校庭像は時代の移り変わりとともに、変化を遂げてきた。そして、それと同じように負薪読書の図像そのものも、時代と地域によって、その意味を変えていくのである。

### 主要参考文献

- 井上章一『ノスタルジック・アイドル—二宮金次郎』 新宿書房 1989年  
名越二荒助『世界に生きる日本の心』 展転社 1987年  
高橋一司『虚像にしたのは誰か』 愛知報徳会 1978年